

アメリカ・サバイバル記（1）

I need your help!

松本 康子

「私の友人はだれか」と家族に問えば、「Nancy と Miles」と最初に答えるでしょう。もし、このカップルに出会わなければ、私のアメリカでの生活は長続きしなかったかもしれません。

この2人を知るきっかけは、「I need your help!」と、彼女らの家の戸を叩いた事でした。

30年近くアメリカに住んでいますが、私自身は今でも、アメリカは外国だという感覚が抜けません。その大きな原因は、英語に対するコンプレックスであり、また、そのカルチャーの違いにあります。それでも、何とかサバイブしてこられたのは、良き友人に恵まれ、大きな助けとなってくれたおかげです。

渡米して3ヵ月後に、UCLA (University of California Los Angeles) の Married Student Housing (妻帯する学生のための家族寮) へ入る事ができました。

その最初の夜、夫が何気なく「ベッド・ルームの床だけど、だんだん熱くなってない？」と不審気に聞きました。気のせいかもしれないと、1時間ほど様子を見る事になり、11時ごろまで待ちました。その間、たびたび床に耳をあてていた夫が、今度は「おい、絶対、水の音がするし、さっきより膨れ上がってるよ！」と騒ぎ始めました。確かに、私が見ても、夫の言うとおりの差し迫った状態です。

入寮したばかりで電話もない状態です。寮の管理事務所に連絡も出来ません。皆寝ているはずの時間でしたが、「誰かに来てもらおうわ。」と、私は隣の家の助けを呼びに飛び出しました。「人に迷惑をかけない」という概念で育てられた私にすれば、この時は本当に助けた必要だったのだと思います。

その時、応対してくれたのがマイルズで、気が焦るばかりの私の話では、何を言っているのかさっぱり分からないようでした。飛び出したのはいいけれど、状況を説明するための心の準備もないのですから、しどろもどろです。それでも、彼は、「I need your help!」だけを正しく理解したようで、すぐに様子を見に来てくれました。

夫が状況を簡単に説明すると、確かに床が熱く、マイルズは「この寮は古いから、こんな事はよくあるんだ。」「うちも、2階から水漏れしてきて、直してもらったばかりだ。」「今日はもう遅いから、来てくれるかどうか分からないけど、事務所に連絡したほうがいいね。」と言っているようでした。ところが、私たちが入寮したばかりで、電話がないと知ると、家へ取って返し、連絡をしてくれました。そして、「水道の元栓を止める」「朝にならないと修理は出来ない」という、管理人からの返事を私たちに伝えるため、また戻って来てくれました。

翌日、「床下のパイプが破れ、床に向かって湯が噴出して」と分かり、信じられない思いがしました。マイルズが言った「よくあるトラブル」は、「日本で全く経験した事がない」私です。これからは、何かあった時、私自身が片言の英語で解決していかななくてはなりません。それ以前に、私の引っ込み思案な性格から、その様な対応をしていけるのか、という不安に落ち込みました。

それから数日後、ナンシーが「クリスマス・イブの日に家へ来ない？」と、家族3人きりの私たちを誘ってくれました。子どものいない家へ、小さい子どもを連れて行く事は、相手ばかりでなく私自身が気を遣うだろうと、普段の私なら断っていたらと思うます。また、クリスマスは、アメリカ人の家庭では、家族が集まる、1年で一番大きなイベントの日です。その当

時、そんな事すら知らなかった私は、「なんて親切なんだろう」くらいに考え、軽くイエスの返事を返していました。

もうすぐ2歳という長女を連れて、初めて、アメリカ人の家庭を訪ねました。ナンシーが焼いた星やツリーを形どったクリスマス・クッキーを、机一杯に食べ散らかした長女を見て、「こんなに家を散らかしたお客は、初めてだ。」とナンシー。今まで、小さなお客を呼んだ事がなかったそうです。け

